

全国民間保育園経営研究懇話会

経営懇ニュース 9月号 (No.214)

2021年9月30日

162-0837 東京都新宿区納戸町 26-3 保育プラザ 3F Tel03-6265-3174 Fax03-6265-3184 gsp10404@nifty.com

経営懇役員リレーエッセイ

お世話になった先生方へ

～ これからもよろしくお願いします

小西文代(愛知・(福)・新瑞福祉会)

先日、東京の志村毅一先生(社会福祉法人民友会)からハガキが届きました。30年間勤められた理事長職を引き継がれるとのこと。「この30年間は、保育園にとって大変な変動の時期でした。次から次へと進められる行政の対応に、戸惑いながら保育園を守ってこられたのは、たくさんの方のみなさんのアドバイスや援助があったからだ、感謝しています。現在の保育をめぐる動向は、私の描く保育園像とは必ずしも一致する方向ではありませんが、今後は理事の一人として、子どもたちと働く親のみなさんの、本当の意味での保育園として、職員とともに力を尽くそうと考えています。新理事長をよろしくお願いします。」とありました。

志村先生は、皆様ご存じの通り、長年経営懇の研修部長として、力を尽くしていただきました。志村先生の中の研修のイメージ、テーマの鋭さ、講師の斬新さ、特に平和の問題ではたくさんの方の事を学ばせていただきました。毎年、セミナーの夜には研修部会が開かれ、夜遅くまで現場の大変さや、園長の悩みを聞いてもらったことを思い出します。経営懇が今何を学ぶべきか、志村先生だったらどうかな?何ておっしゃるかな?と、常に先生をお手本にしている自分がいます。

実は私も、この春に、20年間務めた園長職を退き、今は法人の理事として本部の仕事をしています。

園長になって5年目で経営懇の役員をさせていただきました。当時は、社会福祉基礎構造改革で、福祉3分野は国・自治体の責任をなくして市場化路線まっしぐら(それは今でも同じですが)。高齢や障害分野で措置制度がなくなる中、保育分野はそれを許しませんでした。特に2015年の新制度移行の際は、児童福祉法24条1項を守れと、保育団体の垣根を越えて全国の仲間が手をつないで運動をしました。今年、顧問になられた福岡の原田秀一先生(社会福祉法人紅葉会)が中心となって発信した、経営懇の『児童福祉法24条1項にもとづき保育所経営を貫きしょう』の声明文は全国の仲間を励ました。

大変な時代。保育園の中だけ見ても子どもは守れません。外と繋がる力、学ぶ力、継続する力、助けてと言える力、そんな力が大事なと思います。

そして、経営懇にはヘルプができて、勉強になって、みんなと繋がって発信する、そんな魅力がいっぱい。歴代の役員の方々が築いてくれたこのつながりを、次世代に引き継いでいきたいと思っています。志村先生、原田先生、お世話になりました。そして、これからもよろしくお願いします。

第23回夏季セミナー

対面&オンラインで開催

9月12日（日）に、横浜市にて、第23回夏季セミナーを開催しました。コロナ感染症により、昨年度は開催を見送りましたが、今年は、対面とオンラインの併用での開催にチャレンジしました。会場での参加は約15名、全体では232名の申込みがありました。園で職員らが一緒に視聴した会員園もありました。

Zoomで配信すると同時に、その音声と映像を会場参加者が見えて聞こえるように設営しました。途中、会場の音声が聞こえなくなる等のハプニングもありましたが、無事最後まで配信することができました。対面のみでの開催に比べ、運営面では2倍の手間がかかり運営スタッフが必要ですが、オンラインのみの開催よりも聞き手が目の前にいることで話しやすいことや、実際に開催しているという臨場感を多少でも伝えることができました。



大宮勇雄さん講演

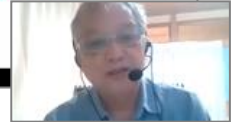
午前は、「保育における「共同」と保育制度—保育政策の根本的転換をめざして」をテーマに大宮勇雄さん（元福島大学）に講演いただきました。

2020年から、新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行し、日々の暮らしや仕事、保育内容まで大きな影響を受けています。コロナ以前から

はじめに どんな時代を生きているのか
=子どもたちと、仲間たちと、今、何を語り合うのか

1) 「重なり合う危機」の時代

- 大震災・原発事故2011 → 「千年に一度」の偶然？
- 経験ない大災害 → 「気候危機」を実感
- 債務の爆発的急増 → 将来へのつけまわし
- 支配者の底なしの腐敗 → 民主主義の危機
- コロナのパンデミック2020 → 危機対応力の危機
⇒ 「コロナ以前も以後も」危機は続く
⇒ 「何に向かって進んでいくか」を語る言葉をもちたい



ある問題もコロナ禍でより鮮明に浮かび上がり、今、様々な危機が重なり合う時代になっています。その中で、未来をどう語り合うか、子どもたちに何が大事と伝え一緒に探求していくのが求められています。そうしたプロセスこそが教育であり、保育の本質的な問題としても深めていく必要があるのではないか、と提起されました。

保育は本来、共感を土台に育ちあう場所です。共感とは、子どもの思いとその理由や背景も理解することが不可欠です。共感の中でその子自身の学びや育つ力が育っていくという実践を、保育現場は積み上げてきました。そこから見えるのは、「保育における「共同」の重要性」です。一緒に語りあうことを通して、他人の考えや話を聞いて、その考え方をもとに（借りて）、自分も考え深めていく、これが共同的思考です。保育の場では、大人も子どもも、保育者も保護者も、一緒にいておしゃべりをする、共感しながら保育・子育てをしているのです。

しかし、そうした一緒にいる・語り合う時間が、規制緩和と政策のもとで奪われてきました。大宮さんは、「共同は不要」とする効率一辺倒の保育論を跳ね返していかなければいけない！と強調し、「こんな保育がしたい」という保育実践のイメージをもとに保育制度や条件の改善を求めることが重要とまとめられました。そして子どもの人間らしい育ちを守るために、政策の根本的転換をあきらめず求め続けていこうと語られました。

シンポジウム～今、保育運動で大事にしたいこと 私たちの課題

午後は、各地をつないで、シンポジウムを行いました。

はじめに、逆井直紀さん（保育研究所）から、保育をめぐる情勢と制度・基準改善の課題についてご報告いただきました。あわせて、ゼロ・1歳児の定員割れの実態について、会員園へのアンケートをもとに、役員の岡千加雄さん（大阪・（福）あおば福祉会）よりご報告いただきました。

逆井さんは、コロナ禍で保育者も保護者も大変な状況にある一方で、コロナに乗じて規制緩和路線が堅持・拡充されようとしている動きを整理し、この動きを打ち破るには、国とともに自治体への働きかけが重要であることをおさえました。そして、今こそ改善のチャンスであり、保育者・保護者が当事者として発信することが求められていると報告されました。岡さんは、年度初めの定員割れが2020年度に比べ全国的に広がっている実態を報告し、定員定額制といった補助が求められることや、配置基準改善を求める運動の必要性を話しました。



↑岡千加雄さん（大阪）
←逆井直紀さん

お二人の話を受けて、各地から、自治体に向けたとりくみが以下のように報告されました。

○「0歳児定員割れアンケートにとりくんで」

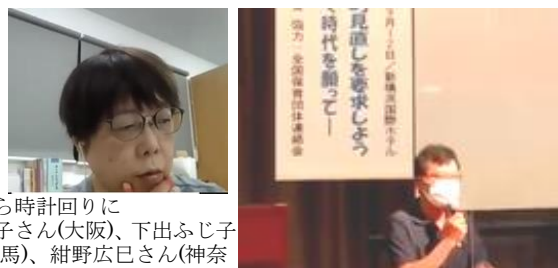
大阪・田辺伸子さん

○「自治体懇談と保育政策の動向～群馬保育問題連絡会」群馬・下出ふじ子さん

○「子育て日本一・京都市はどこへ向かっているのか?!」京都・荒堀育子さん

○「自治体に向けたとりくみ・運動 神奈川からの報告」

神奈川・紺野広巳さん



左上から時計回りに
田辺伸子さん(大阪)、下出ふじ子さん(群馬)、紺野広巳さん(神奈川)、荒堀育子さん(京都)

最後に、セミナーのまとめも兼ねて、森山事務局長が閉会の挨拶を行ないました。各地域で、他団体や様々な人と共同のとりくみを広げようと



していることをみんなの教訓にして、仲間を広げ運動を広げようと語りました。

アンケートより・・・

・コロナで園長も孤独です。園長も雑談できる環境をつくらないと。1人じゃない！と思えることが大切。（東京・園長）

・コロナ禍で、孤独感や孤立感を感じる保護者や家庭が増え、保育園の役割は大きくなっている。保護者・職員との時間を大切にしたい。（園長・50代）

・休憩時間でも子どもの気づきを話題にするところから始めていこうと思った。（理事・60代）

・一時保育、延長保育の保障をかちとった経験に励まされました。要求は「あたりまえ！」（理事）

・地域や保護者・職員の要求を聞いてみんなのものにしていくには？Zoomも利用しながら、まず対話をしていきたい。（北海道・園長）

・定員割れの実態の驚きました。他園とつながることが課題です。（大阪・40代）

第17回主任セミナー

コロナ禍で昨年は中止した主任セミナーですが、今年は、どうやったらできるかを考えてやってみよう、と実行委員会をスタートさせました。ぜひ、各地からご参加ください。

◆第17回主任セミナー

日時：11月12日（金）10：00～16：00

開催方法：オンライン（Zoom）

テーマ：コロナに負けるな オンラインで主任もつながろう！

◆東京の主任さんが実行委員会で準備中

コロナ感染第5波のなか、8月から実行委員会をスタートしました。実行委員会もZoom、セミ

ナー自体もZoomでの開催で、画面越しに初対面の主任たちが、「オンラインでもつながり交流することが大事」と準備をすすめています。

◆参加定員を設けます

慣れないZoomでの運営のため、参加定員を150名とします。そのため、各園からの参加は1名に限定します。ただし、全体会のみ部分参加枠を設け、全体会のみオンデマンド配信の予定です。※詳しくは、案内書をご覧ください。



10:00	12:00	13:00	15:30	16:00
<p>全体会 実践報告 講演・西川由紀子さん</p>	<p>昼食 休憩</p>	<p>分散交流会（テーマに分かれて交流） 1 園運営・職員集団づくり 2 保育を伝える・共につくる 3 主任の仕事とは</p>	<p>全体会 情勢・実方伸子さん まとめ</p>	<p>終了</p>

保育をめぐる情勢

●待機児童数 5,634人

厚生労働省は、8月27日に2021年4月1日現在の「保育所等関連状況取りまとめ」（以下 取りまとめ）を公表し、今年4月1日時点の待機児童数が5,634人であったと明らかにしました。

待機児童は過去最低？

この間、各地で保育施設が新設されるなど受け皿整備が進んだこともあり、待機児童数が一定減少したと言えます。また、コロナ禍のもとで出生数が減少したり、育休の取得・延長や仕事を辞めた人などの影響もあり、入所申し込み者数自体が減少していることもあります。

マスコミ等は、厚労省の主張どおり、1994年の調査開始以来、待機児童数が過去最低になったと報じていますが、待機児童の定義など集計のあ

り方が複数回変更されており、単純な比較はできません。

隠れ待機児童は依然高水準

待機児童数は、本来は、申し込みをしても入所できず、保育所等を利用できない人数です。ところが厚労省は、企業主導型保育事業利用者や育休中、特定の保育園のみ希望している者等、待機児童として数えていません。そのため、待機児童数は少なくなってきたように見えますが、「隠れ待機児童」の人数は6～8万人と例年とあまり変わりません（月刊『保育情報』10月号参照）。

厚労省定義の待機児童数は5,634人と減少していますが、一方で規模で希望に沿った保育が受けられない子どもが8万人以上も存在するという現実があります。2025年に保育需要のピークという厚労省の見方も、現実を反映しているのか厳しくとらえる必要があります。

定員割れ問題、どう考える！？

今年度は、コロナ禍の影響もあってか、年度初めに0歳児の定員割れが各地で起きています。調査研究部のアンケートでも、昨年度より定員割れの園が広がっています。

定員割れは運営費の減収に直結するため、運営の観点から考えると非常に頭が痛い問題です。年度途中での入所希望に応える意味では、年度初めの定員割れ（定員の余裕）も必要です。

定員に空きがあっても人員を確保している施設に運営費を支給するような手立て（定員定額制の補助金等）をとることが、改めて課題になっています。

保育を必要としている児童の受け入れ先

4月当初の保育を必要としている子どもの受け入れ先の割合をみると、保育所73.1%、幼保連携型認定こども園21.5%、幼稚園型認定こども園2.1%、小規模保育事業等地域型保育事業3.3%です。減少してはいますが、依然保育所が過半を占めています。保育を必要とするすべての子どもが、認可保育所など条件を整えた施設で保育を受けられるよう、施設ごとに異なる基準を統一するとともに、大幅に引き上げていくことが重要です。

コロナ関連各地の動き

●経営懇、コロナ緊急要望書提出

コロナ感染第5波により、保育園での感染事例も急激に増加しました。そうした実態を受けて、9月1日に厚労省に緊急要望書を提出しました。主な要望内容は下記の4点です。

1. 検査キットの配布、PCR検査の拡充を
 2. 感染状況により「休園」等の措置ができるよう保護者への支援金や保育体制確保の補助を
 3. 感染発生時の休園日数や保育再開等の基準を厚労省として示すこと
 4. 保育所の配置基準、施設基準の改善を
- 詳しい要望書と、厚労省との懇談内容については、10月号ニュースでお知らせします。

●各地で自治体に要望

大阪では、大阪保育運動連絡会など3団体が大阪府に要望書を提出し記者会見を行いました。京都府宇治市では、会員園も参加している「宇治の保育政策を考える会」が9月7日にすべての保育関係者に公費によるPCR検査実施を求める要望書を、提出しました。北海道では、北海道保育

団体連絡会が9月27日にコロナ対策の強化を求めて、道に要望書を提出しました。

●小学校休業等対応助成金復活

保育所等の休園が増えても休めない・休むと収入が減る！という保護者の切実な声が、いろいろな形で上がる中で、厚労省は9月7日に、保護者の支援策として「小学校休業等対応助成金・支援金」を復活させると発表しました。

昨年度設けられた制度ですが、今年度は廃止されていました。これは、コロナで子どもの世話が必要となった労働者に、有給で休暇を取得させた事業主に対し、賃金相当額（上限あり）を支給する制度です。制度の復活は喜ばしいことですが、使いやすい制度なのか確認が必要です。

●保健所機能がストップ？

会員園からも感染で休園、という報告が届いています。しかし、保健所が機能しておらず、感染発生後の検査がすぐにできず感染がさらに広がるといったケースもありました。保健所や医療機関の体制強化がなければ保育所だけでは対応が難しい面もあります。第6波に備えて、そうした点を国・自治体に求めていきましょう。

コロナ禍での 保育園

10人以上の大規模な

クラスターを経験して

東京・(福)なの花会
つくしんぼ保育園園長 青木路子

東京の千葉との県境にある江戸川区のつくしんぼ保育園は定員89名、職員はパート職員を含め39名です。今回、新型コロナウイルス感染拡大第5波でのクラスター経験を書かせていただきました。

7月～クラス休園後PCR検査を実施し再開へ

7月に園児1名が母から感染し、対象園児のクラスと、隣のクラス(雨天時に室内でアスレチックを合同で行っていたため)を「休園」としました。この時は、園から区、区から保健所、保健所から園と連絡が入り、すぐに園に保健所職員が来て対象クラスと職員のPCR検査を実施。結果全員陰性だったため、土日を含んで5日間休園し、保育を再開することができました。

この経験を教訓に、2クラス以上の合同保育を極力避ける、朝夕の合流保育もギリギリまで行わない、玩具等の消毒の徹底などの対策を主任会議で話し合い、職員に周知しました。

8月～感染発生後の検査ができず感染が拡大

8月中旬に、1歳児担当の職員、保護者に陽性者が出て、1歳児クラスを休園としました(江戸川区との確認で、休園期間は症状の出た日か

ら1週間ということでした。PCR検査を受けて結果が出た時点で3日経っていることが多いため、大抵土日を挟んで5日間、実質2日～3日間協力してもらうことになりました)。

この時は7月とは異なり、保健所が対応することが難しく、PCR検査を一斉に実施できないため、休園期間に何も症状がなければ登園可としました。職員は、マスクをしていたこともあり、『園の運営上自宅待機が可能なら』ということだったので自宅待機とし、すぐにPCR検査を受けてもらいました(内閣府の行っているHELPOというPCR検査を使用)。PCR検査結果が陰性の場合には出勤可とし、自宅待機の期間は公休扱いにしました。

この対応の2日後に3歳児で一日だけ発熱した子(園児B)の母が発熱し、PCR検査を受けた結果、陽性でした。この時点で、3歳児クラスと夕方合流保育にいた2歳児3名が休園対象になり休園となりました。休園になる1日前に、前日ワクチン接種をして、頭が痛いという職員が出勤していました。ワクチン接種の副反応だと思っていたのですが、この職員も翌日から発熱、陽性でした。他にも前の週に一日だけ発熱していた子(園児A)の母も発熱で受診し、親子でPCR検査を受けて次々と陽性になり、あっという間に3歳児に広がり始めました。

症状が出てからPCR検査の結果が明らかになるまでに2～3日かかるため、検査結果を陰性か陽性かドキドキして待つ状況でした。PCR検査を受けたことと検査結果はすぐに保護者や職員に一斉メールで知らせていました。

感染が増えてきた時点で、登園を自粛する園児も出てきました。同時にパート職員8名のうち5名から『緊急事態宣言』が開ける迄の出勤自粛の申し入れがありました。そんな中、今度は、休園開けで登園した1歳児がその日に発熱、

2日後に陽性が判明し、再び1歳児クラスを休園としました。その時園児の対応をしていた副園長、主任と1歳児の担任も合わせて自宅待機となりました。

度重なる休園・・・保護者の励ましが支えに

陽性者が出て休園になるとときには園舎の消毒も行っています。すでに3~4回園舎の消毒を行い、職員はその都度残業です。消毒して、対象クラスが休園しても、また発症してしまう。

一番辛かったのは、保護者に再度休園をお願いする電話をかけなくてはならない時でした。電話は、副主任をはじめクラス担任ではない職員もみんなが協力してくれました。

度重なる休園を伝えても、保護者の皆さんがとても協力的で「こんなに東京で流行っているのだから出るのは仕方ない。お互い様ですよ。」と言って下さったのはありがたかったです。登園していた園児の保護者が「先生たち大丈夫？消毒も大変でしょ？手伝うから言って！夜ならお父さんに子ども預けて来れるから。」と言ってくれた言葉に思わず涙がでました。そんな励ましを受けながら、気持ちを立て直し前に進みました。

感染発生時の一斉検査が重要と実感

また、保護者から7月の様にPCR検査を園でして欲しいという意見があったので、区にそのことを伝え、保健所に掛け合ってもらい、8月30日にPCR検査を1歳児と3歳児に行ってもらいました。PCR検査の結果、無症状で3歳児1名の園児が陽性だと分かり、クラス全体が濃厚接触者と判断され3歳児はあわせて2週間休園になりました。

保健所の助言は「換気を良くすること」「手洗いを小まめにするこ

と」でした。3歳児の部屋は2方向に対面の窓がなく、換気が難しく、今迄、窓を開ける他に、扇風機、空気清浄機をつけ安心していただけるところもあったので、CO2モニターを使い、蚊取り線香で風の流れを調べ、サーキュレータを取り入れました。

このクラスターで最終的に保育士4名、園児9名の感染が確認されました。そのうち無症状者は保育士1名園児3名(1名の職員は定期的に行っているPCR検査で判明)でした。無症状者がいることを目の当たりにして、休園時の一斉PCR検査はとても大切だと感じました。

多くの人に支えられている

また、どこからどう感染したかなどの究明は難しく、これ以上広がらない手段を考えることが最も大切なことだと思いました。職員たちが協力していろいろなアイデアを出し合い進めてこられたこと、保護者が協力して下さったこと、区も土日関わらず電話に応答して頂き、保健所とのパイプ役になってくれたことなど、改めて多くの方に支えられて保育園があるのだと実感しました。

今は少し感染者が減ってきましたが、多くの感染者が出ている時期、感染した職員の中には熱が高かったにも関わらず、自宅療養中保健所からの初の電話が5日以上経ってから来た人もいて、とても大変な状況でした。コロナ感染の恐ろしさを改めて感じました。

この体験を伝えることで、皆様のお役に立てれば幸いです。



お知らせ

●第17回主任セミナー

第17回主任セミナーを開催します。

日時：11月12日（金）10：00～16：00

開催方法：オンライン（Zoom）

参加定員：150名（全参加）

※全体会のみ部分参加は200名

参加費：5,000円（全参加。各園1名限定）

※部分参加の方は3,000円（1名）

申込締切：10月30日（土）

※定員に達し次第、締切ます。お早めに！

●学びの秋！学習会紹介

全国福祉経営研究交流会

「全国福祉経営研究交流会」が、2021年12月9～10日に兵庫で開催されます。Zoomで参加できますので、全国どこからでも参加できます。詳細は先月号に同封のチラシ参照。

保育研究所オンラインセミナー

「保育の今と明日への展望—コロナ禍の実態から考える」をテーマに、11月～2022年1月にかけてオンラインで学習会を開催します。

11月23日▶子育て家庭・保育現場の現状と保育の未来—コロナ禍の実態から考える

12月4日▶少人数学級化の陰ですすむ教育「改革」は保育に何をもたらすのか

1月20日▶子どもの最善の利益を真に尊重する時代へ

1月29日▶コロナ禍から考える 保育の仕事と保育者の専門性

詳細は、同封のチラシ参照。

保育プラザ研修（WEB講座）

職員研修にご活用下さい。詳しくは同封の案内書をご覧ください。

セミナー参加者に聞いてみた

忘れられない、あの一食！

今の職場に入って初めての忘年会。先輩保育士たちのお酒の強さ、頼もしい！

日本酒をおちょこで飲んでた園長は「すぐなくなっちゃう！コップ持ってきて！」とコップ酒。大らかでたくましく、「この職場好き！」と思った。

いっぱいしゃべって、みんなの人となりもわかって、夜遅くまで語り合ったことが懐かしい。

早くコロナなくなって！

（愛知・園長・50代）

【経営懇・活動日誌】8～9月

- 8月30日 経営懇役員会（Zoom）
- 8月31日 合研配信期間終了
- 9月4日全保連常幹・合研常任合同会議
- 9月6日夏季セミナー配信うちあわせ
- 9月9日夏季セミナー準備物発送
- 9月11日夏季セミナー配信設営・配信確認
- 9月12日夏季セミナー、会場には約15名
- 9月14日夏季セミナー録画配信（～26日）
- 9月21日事務局会議（森山・安川・川端）
- 9月22日第2回主任セミナー実行委員会
- 9月23日合研全国実行委員会（総括）
- 9月27日三役会
- 9月29日厚労省懇談～コロナ緊急要望

同封資料

- ①第17回主任セミナー案内書
申込み締切は10月30日ですが、定員になり次第締切ますので、お早めに！
- ②保育研究所オンラインセミナーご案内
- ③保育プラザ研修